秋田県内のことについて書かれた本を探している時に、この本に出会った。

高校生のころ山岳部であった筆者は、秋田県内の峠を歩き、その様子を書き留めた。現存するものから獣道と化したものまで、歴史背景と結びつけて紹介している。初めは、「峠歩き」というタイトルの「歩き」の部分に違和感をもった。私の中で、峠とは、車で走るきつい傾斜の山道というイメージがあったからだ。現代人が峠を歩く姿は、想像がつかなかった。しかし、今でこそ高速道路や電車が通っている秋田だが、昔は峠道を黙々と歩いて生活していただろうと想像した。今でもそんな道が存在するのだろうか、あるなら知りたいという気持ちで読み始めた。

峠は、山を乗り越えるために曲がりくねっている。「新しい道」を使っている人は、視界が悪く危険な上に、移動時間がより多くかかる道をとても不便に思うだろう。バイパスや高速道路に遥かに分があるように思える。峠は、まるで技術の進歩で使われなくなった旧型製品のようではないか。道は移動するためのものとしか考えない人も多くいるはずだ。地形にほぼ左右されない、毎時百キロメートルでも曲がれるカーブの方が良いと考えるだろう。しかし、この書を読んで、無駄と思われる旧道も、十分に楽しく、魅力を持っているものだと思うようになった。歴史や背景を知ったり、地形の特徴を感じ取ったりすることができるからだ。「歴史の道をアウトドアマンが行く」とタイトルにあるように筆者は峠のことを「歴史の道」と言っている。歴史は人の移動により作られる。峠や街道を抜きにすることはできない。ある場所で起きたことだけが歴史なのではなく、どこかへ行くために通るしかなかった険しい道や、人が作った道も、そこに人の生活があるという意味で歴史の道だと言えると思う。

この本の中では廃道も紹介されていた。昔こそ使われていたものの、今ではバイパスが新設されたり、廃村になったために使われなくなったりした道だ。人が使わなければ森はそれを飲み込み元に戻ろうとする。これはいたって普通のことだが、ただの道とはいえども、昔から使われていた歴史のあるものがなくなるのは悲しいと思った。今使っている道が、数年後の地図では、廃道に移り変わっていると思うと複雑だ。そこにいた人達や自分の生活した歴史さえも忘れ去られたように感じるからだ。

　また、私は、この本を読んでから、様々な視点から秋田の風景をみることが大事だと思うようになった。ただの移動でも新しい見方ができれば、より楽しむことができる。地方創生のヒントを与えてくれるかもしれない。今の社会は昔の歴史の上に成り立っている。歴史を構成する一つのパーツである道について知ることは今を見ることにつながる。コロナ渦で人の移動が制限される時代に、道の必要性は薄れそうだ。こんな昔の道の情報が何の役に立つのかと思われるかもしれない。移動「歩くことから遠ざかっている人達は、わざわざ峠に行くことに必要性を感じない。しかし、その地に足を運ぶからこそ見えてくるものや新たな発見があるはずだ。私はまだ、そのような発見はできていないが、様々な地に足を運び、視野を広げ、たくさんの発見をしたいと思う。その場しのぎの考えではなく、過去から現在につながる知識を元に未来のことを考えることができるようになりたい。

峠がまだ日常の中にあったころ、家路に帰る途中に見る夕焼けを人々は楽しみ、変化を発見しながら過ごしていたのではないか。しかし、今の私は、帰りの電車の中で、車窓に映る刻々と変化する夕焼けに目を向けていない。周りのほとんどの人も、手元のスマホをじっと見つめ、リアルタイムで現われる風景は気にとめない。いつでもどこでもスマホが使えるという事実が、日常の一つ一つの体験の機会を奪っているように感じる。

　人は、便利さや安全性、手近な利益を求めるが、それと引き換えに日々の小さな楽しさや幸せを失っている気がする。今後もまた、知らず知らずのうちに消え、忘れられるものがあるかもしれない。目の前にある新しい発見や変化に気づき、心動かすことができる幸せを忘れないでいたい。

　そして、私もいつか、筆者が歩いた峠を歩いてみたい。